特別報告

医療における放射線防護

エビデンスに基づいて現場の質問に答える

巻頭言

独立行政法人　放射線医学総合研究所
理事　辻井博彦

最近の放射線診断技術の進歩は，技術の高度化に伴い，これまで見えなかったものが見えるようになり，全身のCT検査がごく短時間にできるようになるなど，その診断能は確実に向上している。一方，私たちの生活の中で放射線が身近になるにつれ，診断レベルの低線量が人体に与える影響についての関心も高まり，国際的に医療被ばくについての研究が行われるようになってきた。これまではどちらかというと，迅速に正確な診断を行うことに重きがおかれ，医療被ばくについてはもっぱらベネフィットの方を優先させてきたが，最近は，著名な医学誌でエックス線検査による２次がんリスクが指摘されたり，Ｘ線透視後の皮膚障害の可能性に警鐘が鳴らされたり，また，胎児や若年者の放射線影響について報告されるなど，医療被ばく防護への関心が高まっている。

医療被ばくの防護は，医療を受ける側の便益・リスク解析に基づいて判断されるべきものである。この判断は科学的エビデンスに基づいて行われるが，まだ医療被ばくについて議論するのは時期尚早であり，放射線利用の進歩に水をさすものだという意見もある。しかし，最新の科学的知見に基づき放射線防護を実践することにより，現場や患者の不安を低減して，新しい機器や手技の開発を進めることが重要であると考えられる。そのために放射線医学総合研究所（放医研）では，重粒子線治療の研究と共に，放射線防護に関する最新の科学的知見を得るための研究を続けている。

放医研では2010年３月13日（土）に公開講座を開催し，放医研の研究者による医療被ばくのエビデンスに関する講演，「安全と安心の考え方」と題する特別講演，また，医療現場で患者からの質問に対してどのように答えるかをテーマにしたパネルディスカッションを行った。この公開講座により，医療現場の方々に，最新のエビデンスに基づいて，適切な知識や安全に関する考え方を持っていただくことができれば幸いである。

〈0913-8919/10/¥300/ 論文 /JCOPY〉